

# The Exhibition of the “National Treasure Ippen-hijirie” and Jisyuu Studies

ONOZAWA Makoto

## Key words

Ippen Hijirie/Jisyuu/Yugyō-ji Temple/Museum/Exhibition/Cultural Policy

## Summary

In autumn 2015, four museums cooperated to hold a special exhibition to showcase a national treasure, “Ippen Hijirie.” But for this exhibition, the mass media did not show much reaction. In the background there lies a strategy of commercialism such as the selling of movies and songs by major promoters. While there were some problems in the exhibit method, the tour fees and the selection of lecturers, the pictorial record was cheap. We found ourselves looking forward to the powered-up “Ippen-hijirie Exhibit.” Only the steady effort of the grassroots level would activate the stagnant status of Jisyuu studies.

「国宝 一遍聖絵」展にみる時衆研究

小野澤 真

# 「国宝 一遍聖絵」展にみる時衆研究

小野澤 眞

〈キーワード〉 一遍聖絵／時衆／遊行寺／博物館／美術館／展観／文化政策

## はじめに

2015年、南関東の4博物館が連携し、国宝『一遍聖繪』（以下『聖絵』と略す）全12巻を展示する異色の展観が開催された。これは神奈川県藤沢市の時宗総本山清浄光寺（遊行寺）境内にある遊行寺宝物館の改修を記念したもので、『聖絵』が同館に搬入・展示されるのは（管見の限りおそらく）史上初めてのことになる。これまで空調設備が整っていなかったため国宝を展示できなかったと聞いている。のちに時宗（中世は時衆）の宗祖とされる一遍（1239-89）の生涯を描いた『聖絵』は、彼の歿後10年目に完成しその遺弟聖戒の六条道場歓喜光寺（京都市下京区→中京区→東山区→山科区）に長く伝世していたが、同寺の事情で1986年から遊行寺との分有となり、2014年からは遊行寺が所有権を単独保持している。『聖絵』を推戴してきた六条派歓喜光寺と時宗の多数派たる遊行派（藤沢派）遊行寺とは、中世関係がなく、むしろ対立してきた。遊行寺では初めての展示となったというのはこういう経緯からである。

『聖絵』は後述のように新説・新知見がいくつか現れ、15年前の常識が通用しない分野である。手垢にまみれてはいるが、古びた命題ではないのである。

時衆関連の特筆すべき展観は過去30年ほどで、

- ①特別展「遊行の美術 一遍 そして浄土を求め旅した人びと」神奈川県立博物館（現県立歴史博物館）・1985年
- ②特別展「中世を旅する聖たち展—一遍上人と時宗—」神戸市立博物

館・1988年

- ③特別展「一遍―神と仏との出会い―」佐野美術館（静岡県三島市）・1992年
- ④特別展「時衆の美術と文芸―遊行聖の世界―」長野市立博物館・山梨県立美術館・藤沢市民ギャラリー・大津市歴史博物館（巡回）・1995-96年
- ⑤特別展「遊行寺蔵・一遍上人絵巻の世界」神奈川県立歴史博物館・1997年
- ⑥特別陳列「旧七条道場金光寺開創七〇〇年記念 長楽寺の名宝」京都国立博物館・2000年
- ⑦特別陳列「修理完成記念 国宝・一遍聖絵」京都国立博物館・2002年
- ⑧特別展「遊行上人絵 重要文化財光明寺本」最上義光歴史館（山形市）・2013年

と行われてきた。中でも④は歴大な文化財を網羅した空前絶後の展観であり、図録は研究書としても便覧としても使えるものに仕上がっている。この④から20年経って久々の大型展示となったのが今回の『聖絵』展なのである。この長い空白、それこそが時衆研究の現状そのものであり、今回の展示にも学界動向の様相が反映されているとあってよい。

時衆研究を専門とする筆者は、都合により本展観を訪ねていない。しかし世間の興味は低くないと知り、記録する意味から展観のあらましとそれへの批評を文字にすべきだと考えた。筆者は研究の回顧と展望をくり返すことでその分野は活性化されると考えている<sup>(1)</sup>。実際に見学していない疵瑕を補うべく、展観を複数回訪ねた人物からの情報、図録、サイト、パンフレットを大いに活用する。かくも異例ではあるがご諒解いただきたい。

## 1、展観の形式について

『一遍上人絵伝』という国宝指定名称が独り歩きする中、原題である

**【表】 遊行寺宝物館リニューアル記念特別展「国宝 一遍聖絵」の概要（全て2015年）**

**【特別展覧会場および連携展示会場】**

- ① 第1会場 遊行寺宝物館（神奈川県藤沢市）  
10月10日(土)～12月14日(月)10-17時  
※11月16日まで全巻（の各部分）、11月20日より一・七・十一・十二巻展示
- ② 第2会場 神奈川県立歴史博物館（神奈川県横浜市中区）  
11月21日(土)～12月13日(日)9時半-17時 ※四・五・六・十巻展示
- ③ 第3会場 神奈川県立金沢文庫（神奈川県横浜市金沢区）  
11月19日(木)～12月13日(日)9-16時半 ※二・三・八・九巻展示
- ④ 連携企画「一遍と歩く 一遍聖絵にみる聖地と信仰」  
東京国立博物館（本館特別1・2室）（東京都台東区）  
11月3日(火)～12月13日(日)9時半-17時 ※七巻と関連作品を展示

**【関連催事】**

- (1) 図書館パネル展示  
藤沢市総合市民図書館・湘南大庭市民図書館・辻堂市民図書館
- (2) 講演会「聖絵よもやまばなし」於遊行寺、10月17日(土)14-16時  
講師：遠山元浩（遊行寺宝物館館長）  
100名（先着順）、参加無料
- (3) 4館共同スタンプラリー「一遍上人と歩こう」11月3日(火)～12月14日(月)  
台紙配布場所：東京国立博物館・藤沢コンシェルジュ（藤沢駅観光案内所）  
※スタンプを全て集めた場合景品あり、引き替えは遊行寺宝物館のみ
- (4) 月例講演会「一遍とたどる日本の聖地と時宗の文化財」  
於東京国立博物館平成館大講堂 11月7日(土)13時半-15時  
講師：薄井和男（神奈川県立歴史博物館館長）・瀬谷愛（東京国立博物館主任研究員）  
380名（先着順）、参加無料（常設展観覧券要）
- (5) 連続講義「一遍聖絵を語る」於神奈川県立金沢文庫地下大会議室  
第1回「聖徳太子伝と太子廟」11月14日(土)13時半-15時半  
講師：高橋悠介（神奈川県立金沢文庫学芸員）  
第2回「一遍聖の旅、風景の記憶」11月21日(土)13時半-15時半  
講師：米倉迪夫（東京文化財研究所名誉研究員）  
第3回「描れた中世の熊野」11月28日(土)13時半-15時半  
講師：梅沢恵（神奈川県立金沢文庫主任学芸員）  
第4回「一遍とその一族」12月5日(土)13時半-15時半  
講師：山内讓（松山大学法学部教授）  
第5回「一遍聖絵に描かれた律僧」12月12日(土)13時半-15時半  
講師：大塚紀弘（法政大学文学部専任講師）  
以上、100名（事前申し込み制）、5,000円（初日前納）
- (6) 特別展開催記念シンポジウム「国宝一遍聖絵の全貌」  
於東京国立博物館平成館大講堂

11月15日(日)10-16時25分

基調講演\*

「一遍聖絵の中世」五味文彦(放送大学教養学部教授)

パネリスト\*

「一遍の王都入城」相澤正彦(成城大学文芸学部教授)

「社寺参詣曼荼羅」としての聖絵 瀬谷愛(東京国立博物館主任研究員)

「図像学的解釈の試み」梅沢恵(神奈川県立金沢文庫主任学芸員)

「人間一遍」遠山元浩(遊行寺宝物館館長)

「踊り念仏とはなにか」松岡心平(東京大学教養学部教授)

「一遍聖絵の服装描写における特色」佐多芳彦(立正大学文学部教授)

「建築表現のリアリティー」富島義幸(京都大学環境科学部准教授)

討論会\*

総合司会・進行:古川元也(神奈川県立歴史博物館主任学芸員)

380名(事前申し込み制。多数の場合抽選)、参加無料(常設展観覧券要)

(7)特別記念講演会「一遍聖絵の魅力」於神奈川県立歴史博物館講堂

11月23日(月)祝14-16時

講師:長島尚道(時宗教学研究所顧問・兵庫真光寺住職)

70名(事前申し込み制。申し込み多数の場合抽選)、無料(特別展観覧券要)

(8)県博セミナー〔Ⅱ期〕「一遍聖絵を旅する」於神奈川県立歴史博物館講堂

第1回「描かれた中世都市と中世遺跡」11月22日(日)14-16時

講師:鋤柄俊夫(同志社大学文化情報学部教授)

第2回「一遍聖絵の名所描写」11月29日(日)14-16時

講師:谷口耕生(奈良国立博物館学芸部教育室室長)

第3回「描かれた宗教世界を読み解く」12月6日(日)14-16時

講師:古川元也(神奈川県立歴史博物館主任学芸員)・小井川理(同学芸員)

以上、70名(事前申し込み制。多数の場合抽選。一回ごとの申し込み可)、1回1,000円

(9)特別講演会「国宝一遍聖絵」

於神奈川県立金沢文庫、11月22日(日)13時半-15時半

講師:有賀祥隆(東京藝術大学芸術学部客員教授)

事前申し込み制、無料(特別展観覧券要)

(10)学芸員ミニレクチャー、於神奈川県立歴史博物館講堂

11月28日(土)・12月5日(土)・12月12日(土)13時半-14時

80名(申し込み不要。定員を超えた場合先着順)、無料(特別展観覧券要)

(11)ギャラリートーク「一遍とみる聖地と信仰」

於東京国立博物館本館特別2室 12月1日(火)14-14時半

講師:瀬谷愛(東京国立博物館主任研究員)

(12)月例講座「国宝一遍聖絵展・金沢文庫会場の見どころ」於神奈川県立金沢文庫

12月6日(日)13時半-15時

講師:梅沢恵(神奈川県立金沢文庫主任学芸員)

100名(事前申し込み制)、無料(特別展観覧券要)

『一遍聖絵』をタイトルに用いるのは有意義であろう。『一遍上人絵伝』では他阿真教が描かせたと考えられる『一遍上人繪詞傳』（『一遍上人縁起繪』とも。現在では『遊行上人縁起繪』と通称される）との区別がつきにくいし、あえて「聖」という語を一遍の尊称とした撰者の意図を見逃してしまうことになる。どの呼称を用いるかがその論者の立ち位置を示すと筆者は考えている。

筆者が訝るのは、4館開催という規模にしてはマスコミが静観していた点だ。TVでは「日曜美術館」（2015年11月1日）の1コーナーでわずかにとりあげられた程度、新聞では一全国紙各社が後援したにも拘わらず一地方版で1、2回記事になった以外特集されることもなかった。題材に関心もたれていない可能性も要因に挙げうるが、『聖絵』は教科書で必ず言及され知名度は抜群に高い。ブームになる展観というのは実は大手新聞社やテレビ局主催による“作られた狂騒”である側面が非常に強い。遊行寺公式サイトによると本展観は宝物館だけで約16,000人、主催3会場合計で3万人が訪れたという。一方09年に朝日新聞社主催で東京国立博物館と九州国立博物館で開催された「国宝阿修羅展」は、両館で165万人が訪れたという。最大320分待ちという異常事態が発生した16年の東京都美術館「生誕300年記念 若冲展」は、同館とともに日本経済新聞社・日本放送協会・NHKプロモーションが主催だった。もしある宗派が有名博物館で大規模な展観を企図するとしたら、末寺・檀家を総動員し観覧者数を確保できる見込みをもち、新聞社・テレビ局を相棒に据えなければならぬ（かつてある他宗派幹部に相談を受け知人の国立博物館研究員に打診した筆者の実経験である）。このように宗派・学界（博物館）・放送・新聞・広告業者が一種の共同企業体を現出し、時に有名タレントまで動員してCM・特集番組を作ったり都心の各所にポスターを貼り巡らすなど、大手プロモーターが映画や新曲を売り出すような戦略を採る<sup>(2)</sup>。美術商や出版、運送、印刷など多岐に亘る周縁の業界にまで利益をもたらす（中でも新聞社は放送局・出版社を系列にもち利益を囲いこむ）。日本放送協会は「日曜美術館」で展観をとりあげる時は大抵閉幕直前なのに、自局

主催の展観については露骨に開催中ずっと特集番組やスポット宣伝をくり返す（16年であれば前記若冲展。なお絵師伊藤若冲〈1716-1800〉が注目され始めたのは00年の京都国立博物館「没後200年 若冲」展で、知名度向上には展観の力が大きく作用している）。こうした全方位的で派手なプロモーションを行う大規模展観には「大恐竜展」「兵馬俑展」「日本国宝展」「ゴッホ展」「ピカソ展」などがあり、数年に1度の頻度で開催されるのが通例になっている。変わり種では「スター・ウォーズ展」があり、これは独立行政法人化（独立採算制）の下で京都国立博物館が03年に行い話題となった。集客には耳目を集めやすい奇異なテーマを選ぶのが効果が高い。こうした状況下で、遊行寺宝物館が地元の公立博物館と共催したのは、商業主義に乗らない賢明な選択だったといえるかもしれない。なお東京国立博物館が本館の1室を用いた「連携企画」として参加した理由は、『聖絵』巻第七を所蔵しているからである。

その結果、見学者は4箇所を“遊行”することになってしまった。95年の展観は4館ほぼ同内容だから、1箇所行けば済む。しかし今回は4箇所を観に回らなければならない。4館間はそれぞれ距離が微妙に遠く、時間と交通費がかかる<sup>(3)</sup>。後述の学芸員ブログにスタンプラリーの台紙<sup>(4)</sup>が余っていると書かれていたのもむべなるかなである。

また①（丸数字は別掲表）は一般800円、②③は600円、④は620円である。広くない遊行寺宝物館の観覧料は私立とはいえ、高い。国宝の輸送コストはかかっても、それ以外の列品は自館所有のものだから費用は生じないはずだ。寺の境内なので、通常の美術館なら重くのしかかる固定資産税もかからない。今回のことに限らないが、今や博物館・展覧会巡りが時間と財力に余裕のある富裕層と高齢者<sup>(5)</sup>の趣味に成りはててしまったのは、誠に恥ずかしいこの国の文化行政のなせる業である。中でも公立博物館が博物館法第23条の定める無料観覧の原則を率先して破り例外規定を使うのは嘆かわしいことである<sup>(6)</sup>。

地元図書館までをも巻きこんでさまざまな関連企画を立案・実行したことには敬意を表したい。ただギャラリートークが単発の1回だけというの

はいかにも少ない。時衆に関する情報は世上に出回っていないので、ギャラリートークのような地道な社会教育は重要であると考え<sup>(7)</sup>。

遊行寺宝物館は祝日除き毎週火・水・木曜日が休館であった。受付に回す在堪生（修行僧）の人員不足だったのかもしれないが、この世紀のイベントの時だけでも、毎日開館して欲しかった気がする<sup>(8)</sup>。開館日は混雑し30分ごとの入館制限がなされていたという。開館時間も10-16時半でやや短く、改善の余地がある。

県立歴史博物館のサイト内で「捨聖一遍 学芸員遊行のままに」という特設ブログが開設されていた。その試みはおもしろい。宣伝と出来事紹介が多く、目を惹く豆知識・裏話のようなものがなかった上、特に挨拶記事もないまま会期末を前にした19回で途切れてしまったのは残念であった。多忙な学芸員の職務を考えると仕方ないことではある。

## 2、展観および関連催事の内容について

今回最大の目玉である、普段京都国立博物館・奈良国立博物館に6巻ずつ預けられている『聖絵』全巻を並べるのは“快挙”にして“暴挙”といえる。絵巻の真の全体像を知るには不可欠な方法だが、長い絵巻を展示できるケースに限りがあるため、おいそれと実行できない事情があった。ただ『聖絵』は細密な風景画集という面が強い珍しい作風で、しかも全体を暗色で覆っている印象があり<sup>(9)</sup>、人物が大きい『法然上人絵伝』『慕帰絵詞』など通常の高僧伝絵と違って画面のみやすさ・見栄えが劣る。逆にいえば、細かく隅々までの鑑賞に堪えうる『聖絵』は図録の格好の素材といえる。

『聖絵』を論題に据える場合、2つの方向性がある。1つは中世風俗絵画資料としての『聖絵』、もう1つは宗教絵巻・高僧伝としての『聖絵』である<sup>(10)</sup>。

今回の各種催事や図録執筆者をみると、どういう方向性で展観を行おうとしていたのかが浮き彫りとなる。すなわち中世風俗絵画資料としての



『聖絵』に注目する立場である。有料講義の中には「聖徳太子伝と太子廟」「一遍聖絵に描かれた律僧」といった、今風の言葉でいえば「誰得？」といたくなる主題も含まれている（聴講料は一括納付のため特定の回だけキャンセル＝減額できない）。

あくまで時宗が主題である以上、一遍や『聖絵』の本質に立ち返ってほしかった。関連催事や図録にみえる人名は、遊行寺宝物館館長遠山元浩氏を始め、前同館館長長島尚道氏、時宗文化財保存専門委員会委員でもある薄井和男氏と有賀祥隆氏、一遍を追究し続ける山内譲氏は順当な人選といえる。他方その中に一遍研究に精通する時宗宗学林学頭長澤昌幸氏、時衆に関する多数の著作をもつ西市屋西蓮寺前住職梅谷繁樹氏、時宗の生き字引で元藤沢市文書館館長高野修氏、遠山氏と共同で『聖絵』詞書分析を進めた前藤沢市教育委員会学芸員石塚勝氏、900ページに上る『徹底検証一遍聖絵』を著した砂川博氏、『聖絵』に関する論攷多数を世に問い続ける古賀克彦氏、『中世時衆史の研究』を著し『聖絵』一覧をまとめた不肖筆者らの姿がない。筆者はこれまで、一遍教団とその弟子他阿真教以降の現行時宗教団には断絶があること、一遍には念仏勧進聖における普遍性と特殊性とがあり、特殊性の最たるものが時衆の創設であることなど、時衆（時宗）と一遍に関して脱構築を行ってきたつもりである<sup>(11)</sup>。拙論が批判・否定されることは手放しで歓迎するが、一連の論攷をないものとしてふれないというのは学問の作法としてあるべからざることと思う。勿論こうした専門性の高いことを展示の場に反映するのは難しいかもしれない。しかしせめて図録では可能だったはずである<sup>(12)</sup>。瑣事ながら、チラシの隅に小さく「二祖上人七百年御遠忌記念事業」とあるが、二祖上人こと他阿真教は『聖絵』詞書に4箇所登場するだけの脇役なので、牽強の感はある。

遊行寺宝物館では江戸時代の弁天像、平安時代の『阿弥陀経』、鎌倉時代の『安食問答』『六時居讃』など、本展観と関係のないものが並べられ、見学者を混乱させたのはいただけない。同様に県立歴史博物館・県立金沢文庫でも他宗寺院の文化財を同列に並べている。関連資料を思いつく限り

集めてみたのかもしれないが、展示作品目録をみる限り、3館いずれも有機性に欠く陳列であったといわざるをえない点が散見された。たしかに『安食問答』も『六時居讃』も貴重な時衆資料であり国指定重要文化財だが、観覧者にとってはそれが『聖絵』とどう関係するのかなどわかりようもない。なかなか目にできない鎌倉期の『聖絵』の納箱（遊行寺宝物館）、兵庫県神戸市兵庫区・兵庫真光寺が所蔵する一遍の蔵骨器や他阿真教在世中に作られたことがわかった神奈川県小田原市・国府津蓮台寺の他阿真教像など（県立歴史博物館）重要な資料群も出されていただけに、全体の調和を損じさせてしまったようで残念である。『聖絵』と対比させるべき同時期の『遊行上人縁起絵』も関連して展示されていた（遊行寺宝物館、県立歴史博物館）。この比較展示は、それだけで特別展（ないし企画展）テーマになりうる手法だと筆者は常々考えている。前者を引き写し他阿真教を美化したとみられる後者とともに並べて展示したらどれほど示唆に富むことか。

遊行寺宝物館では、押し寄せた来客数の割りに館内が「壁に作り付けのガラスケースと、おそらく可動式のガラスケース、平台が所狭し」で「動線がうまくかけない狭さ」（筆者が聞き取った来訪者の感想）だったという。同館の場合、常設展示室で上述のように特別展示品に若干の常設展示品も同居させているようである。通常は特別催事は常設室とは別の空間で行われることが多いだけに、せめて特別展の時だけでも1階に増室するような思い切った改革が必要に思われる。

### 3、図録について

本展観の図録はB5判・231ページ、オールカラー、何より消費税込み2,000円と廉価なのはありがたい。またページを奥まで開ききっても割れないような特殊加工を施したと学芸員ブログにはあるのも、画を隅々まで堪能するには嬉しい配慮だ。

さて総延長130cmという『聖絵』の全体像をつかむことは至難である。

小松茂美編集『一遍上人絵伝』日本の絵巻20(中央公論社・1988年11月)はオールカラーで全ての画が掲載され、下には詞書の翻刻も載せられた、類書中もっとも便利な書である。ただ同書は大型本で373ページもあり、相当重い。今回の図録は『聖絵』画・詞書全てを中段にサムネイルとして帯で表示し(巻第七は遊行寺蔵模本)、そこから画を上段に拡大し掲載している。下段には詞書の釈文と大意(現代語訳)が載せられている(ただし遠山・石塚両氏が『時宗教学年報』に連載してきた詞書翻刻とは若干異なる)。01年に終了した修葺により詞書に若干の改訂があったため、これまで釈文としては中公版や大橋俊雄『一遍聖絵』岩波文庫青-321-2(岩波書店・2000年7月)よりも京都国立博物館編集『特別陳列 修理完成記念 国宝・一遍聖絵』(同館・2002年10月)が正確であったが、現代語訳がつく本図録はさらに便利であり、爾後手許に置きたい必須文献である。老婆心ながら「『聖絵』全場面をカラーで収録!」とか「最新成果を元に『聖絵』詞書を全て翻刻!口語訳付き」といった惹句があれば大いに注目された気がする。

今回の図録は全画掲載を主眼としたとみえて、図録によくある図版解説や論文ページはない。埋め草に関連催事で講演した研究者による短いコラムが載る程度である。絵巻の図録である以上、法量一覧はあった方が良かったと思う。有賀祥隆氏の巻頭解説はざっくりとしすぎており、『聖絵』研究の最前線について総括した論放がほしかった。

というのは、『聖絵』研究の進展と修理に基づく新知見によって、いくつも大きな論点が注目されるからである。1つは『聖絵』撰定の檀越(スポンサー)である。巻第十二第三段に「一人のすゝめによりて此画図をうつし、一念の信をもよをさむかために彼行状をあらはせり」とある「一人」<sup>いちのひと</sup>が関白九条忠教とされてきたが、黒田日出男氏によりそう読めないことが指摘されている<sup>(13)</sup>。2つは『聖絵』の精緻な写実性である。これまで現地に忠実な描写から、撰者聖戒が絵師を連れて再訪したのではないかといわれていたが、左右が誤って反転していたり、画と詞書に矛盾があることなどから、信頼性が揺らいでいる。3点目は筑前国武士の館と臨終の

シーンに代表される、修整された一遍像である。特にこの武士の館では訪れた一遍が修整前は半裸だったことで、詞書において主が「此僧は日本一の狂惑のもの」(巻第四第一段)と蔑んだこととうまく整合するのである。修整後の一遍は普通に衣を纏っているため、主が一遍を見下す意図がわからなくなってしまっている。改変の時期はわかっておらず、課題となっている。

これらは会場でパネルで解説されていた可能性が高いが、図録では数行だけ出典なしでふれられるに留まっている。より反映させるべきだったように思う。

なお県立金沢文庫では独自に別冊の図録を出していたとのことだが、落手できていない。広く告知されておらず筆者は一般市民のブログで知った。

## おわりに

以上、時に苦言も呈したが、『聖絵』展への期待の高さゆえとお赦しいただきたい。

新自由主義政策によって指定管理者制度や独立採算制(事実上の民営化)が導入され、公立の博物館・図書館の現場は日々息苦しくなっている。「ツタヤ図書館」の問題が顕在化したのは記憶に生々しい。私立の博物館・美術館はその影響で公立施設と限られたパイ(客)の奪い合いになっている。いずれにおいても、いかに集客するかが展覧会の至上命題になっており、『聖絵』展でも、宗教絵巻の側面より風俗絵画の側面を前面に出さざるをえないのは担当者の苦渋の判断だったことと思う。筆者周辺では『聖絵』展に「行きたかったが行けなかった」「1館しか行けなかった」という人ばかりで、全館回った人は皆無であった。いつの日か観やすくパワーアップした『聖絵』展が開催されることを望む。

2010年、遊行寺境内の公衆トイレが改修され休憩所を併設、14年には地藏堂が再建された。15年は中雀門・青銅製灯籠が市指定文化財となり

遊行寺本堂が国登録有形文化財に指定された。繁栄の中心が駅周辺に移って久しい遊行寺も東海道有数の名所だった往時の偉容を取り戻しつつある。宝物館がリニューアルされ、16年に遊行寺門前に公設の文化施設「ふじさわ宿交流館」ができた<sup>(14)</sup>。そうした動きが、地域の文化振興に資することを期待してやまない。草の根の地道な活動こそが、滞留久しい時衆研究の活性化にもなるはずである。ほかならぬ筆者自身、郷土史探訪の延長で藤沢市民ギャラリーでの「時衆の美術と文芸展」を観覧し感動したのが時衆研究を始めた直接の端緒であったから。

最後に古賀克彦、玉井ゆかり氏の教示に感謝申し上げる。

## 註

- (1) 拙稿「【研究動向】時衆研究の三世—過去・現在・未来—」拙著『時衆文献目録』（高志書院・2016年4月）。その第1弾が拙稿「《研究ノート》二〇〇〇年代後半以降における時衆研究の回顧」『六軒丁中世史研究』第十五号（東北学院大学中世史研究会・2013年12月）である。
- (2) 外川拓・恩蔵直人「マーケティング・エクセレンスを求めて シリーズ第86回「国宝阿修羅展」にみるマーケティングの新潮流」『マーケティングジャーナル』Vol.30 No.3（日本マーケティング協会・2011年1月）では、「阿修羅展」など新聞社主催の大規模展における、さまざまなメディアを動員したマーケティング・プロモーションの実態が詳細に描写されている。
- (3) 神奈川県立歴史博物館の最寄り駅根岸線関内駅から県立金沢文庫の最寄り駅京急本線金沢文庫駅は420円。徒歩8分の関内駅でなく15分の京急本線日ノ出町駅から乗れば乗り換えせず240円で済む。4館に分かれた不便を観覧者に強いる以上、こうしたアナウンスをする細やかな配慮も肝要だ。
- (4) 蛇足だがこの台紙を配布する藤沢駅観光案内所の女性職員の様子がややよろしくなかったという目撃談がある。些細な接客1つで街全体の印象に悪影響をもたらすので当局は心すべき事柄である。
- (5) 高齢者の数が目だつのは、単純に団塊世代の人口が多いのもあるが、時間が自由なのは勿論、可処分所得が多い上に一定年齢になると交通機関の無料パスがえられ観覧料が割引かれるためである。
- (6) 先述した博物館会場を確保する障壁の高さも、貧困な文化政策の結果である。一口に公立博物館・美術館での特別展といっても、館が主導するものと館が場所貸

「国宝 一遍聖絵」展にみる時衆研究

- しして名義だけ共催とする例がある。マスコミが派手に宣伝する場合は後者である。00年頃からの新自由主義政策により公立といえども採算性が求められるようになったため、主催者は高額な会場使用料の支出が必要だと仄聞している。
- (7) これに近いものとしてボランティアによる即席の解説がしばしば行われるが、ボランティア市民は学芸員に比べ専門性が低く、知識が微妙に間違っていたり質問に答えられないことがある。1997年の神奈川県立歴史博物館の展観では途中から筆者の友人がボランティアの方に逆“講義”する一齣もあった。やはり学芸員による解説が望ましいというべきだろう。
- (8) 筆者の関西に住む知人は、平日に車で訪れて嘆きの結末をSNSに書きこんでいた。下調べをしなかったのは迂闊とはいえ、まさか平日に3日連続で休みとは想像しなかったのだろう。
- (9) 『聖絵』は絹本著色なので、それを構成する絹糸の経年劣化が原因らしい。
- (10) 金井清光「宗教絵巻としての『一遍聖絵』」金井『一遍の宗教とその変容』（岩田書院・2000年12月）
- (11) 拙稿「中世「時衆」の成立——遍・他阿真教による組織化と庶民化——」鎌倉遺文研究会編『鎌倉遺文研究』第二十八号（同会〈吉川弘文館発売〉・2011年10月、のち「一遍智真による時衆構築と他阿真教によるその変容」と改題し拙著『中世時衆史の研究』八木書店・2012年6月、所収）
- (12) 時衆の再定義を試みた拙稿「時衆とは何か——時衆研究への視座——」時衆文化研究会編集『時衆文化』創刊号（同会〈岩田書院発売〉・2000年4月、のち「時衆の定義」と改題し拙著『中世時衆史の研究』八木書店・2012年6月、所収）と前掲註(11)論攷は時衆を論ずる上で不可避である。時衆史を一般向けに解説した桜井哲夫『一遍と時衆の謎——時衆史を読み解く——』平凡社新書748（同社・2014年9月）は好著であり、拙著とは大いに重なるにも拘わらず、拙著の紹介がまったくない。自分に関わることで気が重い、フェアとはいいがたいとあえて申し添えておきたい。
- (13) 黒田日出男「一人のすゝめによりて（上・中・下）『一遍聖絵』読解の試みから」（『UP』240-242号、東京大学出版会・1992年10-12月）。「一人」は「一念<sup>いちにん</sup>」との対句表現だから特定の誰かではない、とする。古賀克彦氏も同調する。
- (14) 藤沢市は40万人規模の市区町村で唯一公立博物館がなく、教育委員会に置かれていた博物館建設の担当部署は13年春に26年の歴史に幕を閉じ、建設断念が内定した。このことが『聖絵』展の同時開催を藤沢から離れた県立歴史博物館などに行うしかない背景となっている。

（武蔵野大学仏教文化研究所研究員（専門）日本史）